

元日弁連会長

つちや こうけん  
土屋 公献 さん

(9月25日、腎がんで死去、86歳)



731部隊の細菌戦を巡る訴訟の1審判決について報告する土屋さん(2002年8月28日、東京・永田町で—瀬法律事務所提供)

旧制高校時代、クラス全員がそろった集合写真は一枚しかない。担任教師の隣に座り、級友のはなむけの言葉が書かれた日の丸を手にしている。クラスで最初に徴兵され、学徒出陣した一人だった。

1945年1月、海軍兵として小笠原諸島の父島に赴任。剣道二段の腕前で、上官から米兵の捕虜を日本刀で処刑するよう命じられた。ところが直前になって、四段の少尉が名乗り出て、自らは手を下さずに済んだ。少尉は終戦後、米軍に追われ自殺した。「私の身代わりになった」。自責の念は、後年、戦後補償問題に取り組み原動力になった。

52年に東大法学部を卒業し、高校の英語教師になったが、友人の勧めで転身を決意。

## 「街の弁護士」貫いた硬骨漢

34歳で司法試験に合格した。63年に東京で起きた吉屋ちゃん誘拐殺人事件では、周囲の反対にもかかわらず、弁護を引き受けた。犠牲になった4歳児を捜す運動が広がり、弁護士にも厳しい目が向けられた。だが、「弁護士として言うべきことは言う」と自らを奮い立たせた。

きっぱりした物言いの硬骨漢として次第に信望を集め、94年には日本弁護士連合会の会長に選ばれた。この頃から、アジアの戦争被害の問題に力を注ぎ、中国での731部隊による細菌戦を巡る訴訟では弁護団長を務めた。旧陸軍で部隊から報告を受けていた男性に当時の日誌の公開を求め、手紙を送って面談の約束を取り付けたこともあ

る。

「書かれた物を誰でも使えるようにしてほしい。それが歴史に対する個人のあり方ではないか」。熱く語りかける、男性も前向きな様子を見せた。同行した一瀬徹一郎弁護士(61)は「ポイントを押さえて説得する論法は法廷の姿そのものだった」と振り返る。

結局、日誌の公開は実現しなかったが、東京地裁の判決は、細菌兵器の実戦使用による被害を初めて認定した。

06年6月に医師から余命3か月と告げられた。闘病中も在日朝鮮人総連合会の代理人を務め、07年6月には朝鮮総連中央本部の売却を巡る事件で、東京地検から事情聴取を受けた。売買代金を受け取る前に登記を済ませたことに、弁護士からも批判が出たが、「合法的な競売回避だ」との主張は変わらなかった。

昨年10月、「弁護士魂」を出版し、知人らの呼びかけで出版を祝う集いが開かれた。妻の富美子さん(78)に支えられて姿を現し、「ださいタイトルを付けてしまっ」と照れ笑いを浮かべた。

その一章の題は、「誇りを持って一介の街弁(街の弁護士の意)に徹す」だった。(東京本社社会部 児玉浩太郎)